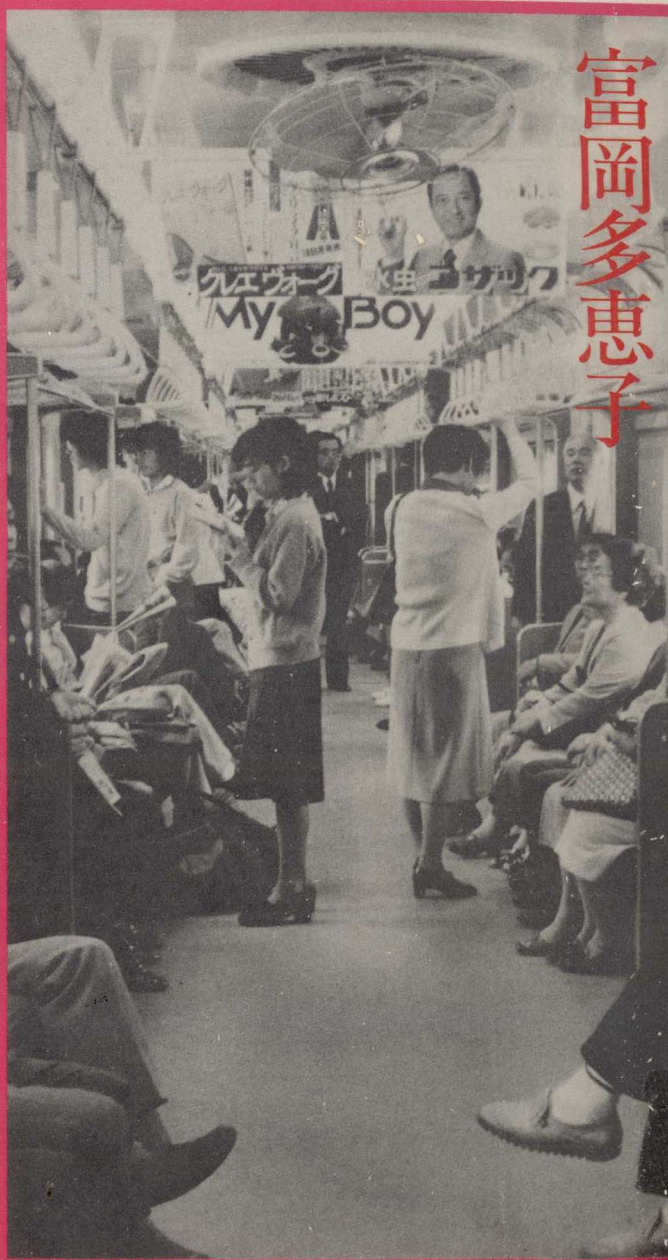


砂 に 風

富岡多恵子



富岡多恵子

砂に風

砂に風

昭和五十六年十月十日 第一刷

著者略歴

昭和十年、大阪に生まれる。大阪女子大学英文科卒。在学中の処女詩集『返禮』でH氏賞を受賞。主なる作品に詩集『物語の明くる日』（室生犀星賞）、小説に『丘に向ってひとは並ぶ』、『植物祭』（田村俊子賞）『壺中庵異聞』、『冥途の家族』（女流文学賞）、『当世凡人伝』（川端康成文学賞）、『狷狗』、『三千世界に梅の花』、『エッセイ集に『さまざまなうた』、『写真の時代』、『近松浄瑠璃私考』などがある。

定価 一〇〇〇円

著者

富岡多恵子
とみおかたえこ

発行者

杉村友一

発行所

株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三二二三
電話 (〇三) 二六五一二二二

印刷所

大日本印刷

製本所

大日製本

万一落丁乱丁の場合は
お取替致します

砂
に
風

一九五七年の五月から一九五九年十二月までの間、わたしは「^{ガッコ}学校の先生^{キッ*}」をしていた。「^{ガッコ}学校の先生」になることを、二十歳ぐらいのころから強く希望し、公立中学の教師になりたいと思っていた。

二十歳の女子学生は、まず「学校の先生」という職業にアコガレていた。だから、「学校の先生」にでもなろうかというデモ先生や、「学校の先生」にしかなれぬシカ先生という当時ハヤリのいい方に、おおいに反発を感じていた。といって、現実的な勘定もはたらいていた。「学校の先生」なら、女も男と同じ給料だろうと思っていた。

二十二歳の時、わたしは「ガッコのセンセ」になった。丸二年半の間、たしかに「ガッコのセンセ」ではあった。しかし、あれが「ガッコのセンセ」なら、世の中の「学校の先生」たちにリンチを受けるような恐怖も感ずるのである。いや、リンチはともかく、別の恐怖感はその

から二十数年すぎた今日も去らないのである。

一九六一年の春ごろだったと思うが、東京に移り住んでいたわたしが親の家に帰るために大阪駅へ降りたち、国電のプラットホームにぼんやり立っていると、派手な縞の背広を着た若い男に肩をたたかれた。

「センセやないですか。今ごろこんなところでなにしてるんですか」と派手な背広の男はいった。「山上センセでしょ。二年の時センセの組やった〇〇ですよ。覚えてないですか」と若い男は愛想よくいうが、わたしはだれだかわからなかった。髪のかたち、服、靴のすべてが、カタギのつとめ人風には見えなかった。

「センセ、えらいシヨボンとしてるやないですか、春爛漫やというのに。ぼくですか、まあ、ボチボチやってます」と男はいつて、手を振りながら去っていった。

それから、二度とこういう昔の生徒に呼びとめられたことはない。

最初の年は、二年B組の担任だった。生徒は十六歳か十七歳である。落第したり、病気で休学した生徒は十八歳とか十九歳である。女教師は二十二歳になったばかりである。

たしか「その人は女教師」というタイトルの日本映画があった。広告によると女教師と男子生徒の恋愛映画のようだった。わたしはその映画は見なかった。

教師をやめて数年後、フランスの高校（リセ）で女教師と男子生徒の恋愛事件があり、婦人

雑誌でわたしはその成りゆき顛末を知った。「その人は女教師」は、その事件からのヒントでつくられたのかもしれないが、時期も忘れ、内容も知らないからたしかなことではない。フランスで起った事件は、わたしの「ガッコのセンセ」の時とはあまりにもちがっていて、そのこともあつて興味がありません、事件の報道をわたしは追ひもとめて読んでいた。

まず、「センセ」がちがつていた。三十歳ぐらいのその女教師は、秀才の男性でも一度は落ちるといわれる教授資格試験（アグレガシオン）に、五百人中三番の成績で合格して高校教師になった秀才であつた。生徒は十七歳の男子で、これもまた秀才か準秀才。五月革命で接近したというこの秀才たちの恋愛だけなら事件とはならなかったが、十七歳の男子の両親が、女教師を訴えたため、裁判となり、秀才女教師は、「未成年者誘拐罪」で牢屋に入れられてしまったのである。男子の両親は、ふたりとも大学教授である。ヒドイ、とわたしは思い、売春、盗み、横領をした女たちのある牢屋に入れられたオンナ先生に同情した。

十七歳の秀才男子は語っていた——われわれは対等に愛し合っていた、むしろ彼女の方が未熟だった。しかし、秀才男子は親の属するブルジョワジーのモラルと意識に敗北した。男と女の年齢が逆なら、こんなことは昔からいくらでもあるのに、とオンナ先生側は憤慨していた。フランスの歴史的事情も社会的事情も知らぬわたしでさえ、フランスの十七歳の男子ならずで充分精神も肉体もオトナだろうと想像した。そのころ婦人雑誌に出ていた十七歳の「少年」

の写真は、ヒゲをやし、するどい目つきをした、壮年男子のような面構えだった。しかも、男子があと一カ月か二カ月で十八歳になるという時に、両親が訴え出たのも卑劣に思えた。それに、事件の成りゆき、顛末を知れば知るほど、オンナ先生はいちずで純粹、秀才男子の方が恋愛をリードしている様子が感じられた。きつと、ムツカシイことをふたりは喋っていたんだろうなあ、とわたしは思ったりした。しかし、その女教師が自殺したのを知った時は衝撃を受けた。

わたしは公立中学の教師になれなかった。都府県の行く教員採用試験に落ちたからだった。フランスのオンナ先生のように牢屋へ入る資格もなく、そんな機会の生れようもないのだった。しかし、「ガッコのセンセ」にはなることができた。

はじめての、「センセ」としての夏休みが終って、二期期のはじまった九月の終りごろだった。わたしは学校を休んでずっと家にいた。二期期の最初の一週間くらいは学校へいったが、そのあと休んでいた。医者の診断は疲労による自律神経失調症だったが、今でいえば「センセ」の登校拒否症である。

土曜日の午後三時ごろ、突然、五人の男の子が「センセ」の家にやってきた。ひとりが、大きな果物籠をかかえている。このごろでは、ああいう大げさなものは見かけなくなつたが、当時は病氣見舞用にモノモノしい果物籠があつた。あげ底用の紙のつめものの上に、外へこぼれ

んばかりに、さまざまな果物を積みあげ、それをセロファンで包み、籠の手には、大きなモモ色のリボンが結びつけてあった。

五人の男の子と果物籠を玄関で見た時、センセはびっくり仰天してしまつて、オロオロしながら、二階の、自分の部屋へかれらを通した。部屋には蒲団が敷いてあった。咄嗟に、自分がホントに病気であることを生徒たちに見せようとしたのかもしれない。玄関のとなりの客間に通すこともできたのである。センセはあわてて蒲団を三つにたたみ、それにもたれるようにして、いかにも病人らしく坐つた。男の子たちは、窓の方を背にしてちぢこまり、かたまつて坐つた。階下から母親がサイダーをもつてきたが、だれもコップに手を出さない。

「センセ、寝てなくていいんですか」と男の子のひとりがいった。

「大丈夫よ、もういいんだから。お医者さんは寝てなさいっていうけど」とセンセは嘘をいつている。お医者さんは旅行でもしなさいとすすめている――。

「ぼくらの組は、運が悪いんですワ。△△センセが二年になったとたんに肺病でやめて、そのあときたセンセが、二学期になつたと思つたら休みやから――」といちばん大人びた男の子がいった。

わたしはB組担任の△△先生が突然結核療養のために休職したため、そのアトガマに採用されたのだつた。

男の子たちは、窮屈そうに正座している。センセはてれくさくて、煙草を喫う。

「センセ、煙草喫うてもいいんですか」といちばん小柄の、こまちゃくれた感じの子がいった。
「いいよ、煙草ぐらいー」とセンセは、はしゃいだ声をあげた。

男の子たちの緊張が少し解けてきた。かれらはクラスの代表として担任のセンセの見舞にきたのである。

センセの部屋は学生の時のままで、勉強机と本棚がおいであるだけだった。昔風の日本家屋で、広い縁側が部屋につづいていた。そこに小さな藤椅子とテーブルがおいであつた。男の子五人と対座しているのに疲れて、センセは藤椅子にかけた。すると五人は立上つてきて、縁側の欄干にもたれて下の庭を無邪気にのぞきこんだ。かれらも正座しているのが苦しくなつて立上つたのだった。

「センセ、煙草一本もらつていいですか」と男の子のひとりがいった。

「煙草喫つたら退学でしょ」とセンセはわざと真面目な顔でいった。

「学校には内緒で」と男の子はいかにもいたずらする楽しみをあらわすように、にっこりと、しかしずるそうに笑つた。

「学校にバラすわよ」とセンセもなにやら急に楽しくなつてきた。

「センセは、絶対にバラせへんー」と男の子は、ちよつと甘えるように笑つた。

「そうや、センセは絶対にバラすようなきたないことはせえへん！」と他の男の子も、いかにも楽しそうに笑った。

「絶対に学校にタレコムー」とセンセは楽しさをこらえて、いかにも本気の顔でいったが、すでにセンセの気持はかれらに通じてしまっているのだった。

「ぼくらは、絶対にセンセを学校にタレコムのようなことはしません！」と男の子らは口々に声をあげた。かれらの声は楽しく踊っていた。

「ぼくらがたれこんだら、センセもクビや」と煙草を箱から抜きとった男の子ふたりは笑った。「そうか、だまされたー」とセンセはわざと嘆く振りをした。みんなは大いに笑った。

次の週から、センセは登校した。そして朝禮のあとの「身体検査」では、担任の義務として生徒ひとりひとりのズボンのポケットまで、喫煙の証拠品をさがし出すのだった。

センセは自分が一カ月近くも登校拒否をしたのが、なにによっているか、勿論知っていた。休んでいた一カ月たらずの期間は、いわば執行猶予期間だった。学校をやめるかつづけるか決定するのを、一カ月ひきのばしていたのであった。結局やめなかった。それは、「二十四の瞳」のような、生徒たちの見舞のおかげではなかった。センセは、及ばずながら挑戦に出たのだった。

病気になった原因はふたつある、とセンセは思った。第一の原因は、英語教員の免許しかな

いの、結核で休んだ先生に代って「日本史」の授業を命令され、それをやっていたことだった。無免許運転ならつかまるのに、無免許授業はつかまるところか学校の命令であった。センセは、それがうしろめたいだけでなく、実際に「日本史」の授業をするのは不可能なのであった。学校がくれた教師用トラの巻をメモしていつて、黒板に写すくらいしかできないのだった。しかし、校長は企業の社長なのであるから、絶対の社長命令にさからうことは退職することだとセンセは思った。学校は、無免許授業を外部にもらすなどとはいわなかった。しかしセンセは、親にも友人にもかくしていた。

第二の原因は、企業主の企業方針だった。学校は聖域である。その中へ入るまで外から内部の事情はわからない。企業主は、毎朝、全校生徒及び職員を前にして演説する。それは企業主の思想の表明であり、生徒及び職員へのアジェンダだった。生徒たちよ、お前たちはバカだ、と彼はまずアジった。お前たちはアタマが悪い人間なので、公立の学校や一流校へはいくことができなかった、と演説はつづいた。アタマの悪い、バカな人間も生きていかななくてはならない、世の中へ出るとアタマの悪い人間は、アタマの良い人間に可愛がられることが大事だ。アタマの悪い人間は、アタマの良い人間のいうことをハイハイと気持よくきかねばならない、そのためには、この学校にいる間に、先生方のいうことをよくきいて、そういう人間に訓練される必要がある、世間にさからうようなおろか者は、この学校からは絶対に出さない、お前た

ちはアタマが悪い、このことをヨーク覚えておいて行動しろ、と六十歳くらいで、瘦せぎすの企業主は毎朝いった。二十二歳の女センセはちぢみあがつてしまった。

病気は、実際に肉体的苦痛をとまっていた。目まい、頭痛、吐き気がひどくなり、ものを食べないから衰弱した。自律神経がおかしいといわれた女センセは、神経症の治し方のごときハウツーものの本を買って読みあさった。からだ全体が、あの学校をやめろといっているのだと納得した。やめないゾと思いはじめたところに坊主頭の男の子五人が見舞にきたのだった。

学校へ出はじめても、休む前とはなにひとつ変らなかつた。朝の演説の内容も同じであり、その内容を企業主に代って実現する、教師が数人いるのも同じだった。

公立校や一流私立校の教師にはなれなかつた女センセも「アタマの悪いバカな人間」としては、生徒と同類であつた。毎朝の企業主の演説によって、改めてそれに気がついた時、休む前より生徒に身構えるところがなくなつた。それにしても、生徒は全校で千人余いるが、毎年三百人以上の「アタマの悪いバカな人間」が卒業して世の中へ送り出され、「アタマの良い人間にハイハイいう」としたら、と若い女センセは想像して恐怖した。けれども、「アタマの悪いバカな人間」が、ハイハイいうとは限らぬではないか、とも思っていた。げんに、担任クラス五十人の男の子の、ありとあらゆる女センセへの攻撃のかけ方は、とても頭の悪い人間の仕わ

ざとは思えない。攻撃だけではない。男が女に示す、あらゆる甘えや媚びや軽蔑を、十六や十七の男の子がすでに表現しているではないか。わざと悪いことをして、女センセに特別に叱られて甘えてみたい男の子。放課後かならず埒もないことを質問にきて、女センセをひとり占めしたい男の子。センセは女のくせに煙草喫っている、と告発にきては、センセの「女」を問う男の子。女センセに聞えるようにわざと「女とやった」「女を買った」と友だち同士で喋る男の子。主にタカ派教師のやり口を手紙で密告する男の子。ラブレターまがいの手紙をたびたび自宅宛によこす男の子。そしてかれらが五十人で群になった時、「センセはまだバージン？」とからかつては、女センセがどのように答えるか、生ツバのんで見物しているのだ。「アタマの悪いバカな人間」を馬鹿にしてはいけない。「アタマの悪いバカな人間」たる女センセも、少しづつかれら五十人のボスたるべく手を打ってきているではないか。五十人、いや五十匹の若いオスザルの中に、一匹のメスザルが放りこまれたのだ。闘争が起るのは当然だ。メスザルはかれらの中でボスにならないと「センセ」にも「担任教師」にもなれないのである。それには、五十匹を支配しているオスザルのボスを支配する必要がある。「雀の学校のセンセ」ならぬ、「お猿の学校のセンセ」になったのである。

彼らは、叱ると幼稚な反撃をくり返す。叱らないとナメてかかる。ほめると甘える。親しくするとつけあがる。そしてサル社会、いやヒト社会の社会的学習によって、オスがメスより優

位である、と「アタマの悪いバカな人間」にもインプリンティング（刷りこみ）されている。

「センセ、よくきてくれましたなあ。休まれた時、てつきりやめられると思って心配してたんですよ。今まで、女のセンセで、三カ月以上続いたセンセはいないんです。うちは男子ばかりだから、女のセンセが三人くらいはいてほしいんですけどね」と副校長はいった。「ご迷惑をおかけしました」と女センセは頭をさげた。

センセは、地図を見ながら、ごちゃごちゃした市場のような狭い商店街のアーケードをくぐりぬけて、生徒の家をさがし出した。間口一間の狭い店の奥で、汚れたワカメのように汗でぬれた髪をたらしした男が、靴の踵をたたいていた。男はひと声、振りむいて「センセがきはったでー」とどなった。

四十か五十かわからぬ瘦せた女が出てきて、センセを男の仕事場から奥の狭い部屋へあがらせた。

「うちの子がなんぞ悪いことしましたか」と母親はいいながら、湿った薄い座蒲団を出した。

センセがきたのは、学校の命令による、生徒が未払いの授業料の催促をかねた「家庭訪問」のためだった。

「センセ、頼みますわ、落第だけはカンニンして下さい。なあ、センセ、うちはご覧のように、

あの子を学校へやるのにギリギリですねん。それでもね、あの子を学校へやるのは、男の子は、せめて高校は出とかんとね、これからの時代はね、恥かしい思うて。こなしでわたしも内職しまして。

まあ、聞いたって下さい、お父さんがね、昔はあれでも大きな店もってね、結構にやってましたんやけどね、コレ（酒をのむ真似）とね、やっぱりコレ（小指を立てる）でね、わたしもいやになってしもたんですけどね、子供のこと思たらそうもいかんしね。センセ、おたの申しますわ、落第だけは。卒業が一年のびるのは、つらいですわ」と母親はいった。

「落第じゃないんです」とセンセは冷静な声でいった。

「そうですか。なんや、落第やないんですか。お父さーん、落第とちがうんやてー」と母親は店の男に声をかける。

「授業料？ ああ、月謝ですか。いやもう、減相もない、忘れてるやなんて。ただ、ちょっとね、先月、とりこみごとがありましたね、それで、申しわけないことです。センセ、来月の月末まで待つて下さい。えらいすみません、来月の月末には。ほんとにもう、センセ、えらいすまんことです」と母親は畳に頭をすりつける。

センセは、借金のとりたてにきたような気分させられて、茫然としている。もし自分がセンセでなければ、この母親は、二十二歳の、まだ学生にちょっと毛のはえたばかりの女に、こ